

GSI キャラバン

「社会における相互理解の可能性を探る言語理論研究」

森 芳樹

#### プロジェクト概要

昨今の社会情勢を見ても分かるように、何が真実であって何が真実でないかは、自明の問題ではない。しかしまた、明らかな虚偽を虚偽と判じることができなければ、コミュニケーションや言語行為が無に帰してしまう。これは社会的、社会科学的な問題であるだけでなく、理論言語学にとってもその定位に関わる問題だと考える。加えて、コミュニケーションのツールに大きな変化が見られる現代においては、コミュニケーションの様態が変化してきているというだけでなく、その中で個人の持つ知識と信念の関係性も変化してきている。このプロジェクトでは、この変化がコミュニケーションと言語にどのような影響をもたらしているかという問題意識から、知識と信念の関係性に関する言語分析と言語理論の展開を目標とする。グローバル・スタディーズにとっても、その基底的部分、つまり、なにがコミュニケーションを可能にするのか、あるいはまた、なぜコミュニケーションは失敗するのかを問い直す研究として位置づけられる。

このような問題設定の中では、さまざまな方法論によるアプローチが可能であろう。言語学に限っても、社会における実際の言語使用の調査研究、ニューメディアにおけるコミュニケーション研究、言語変遷のメカニズムの追究、「説得力」を問題にする修辞論、文体論研究などとの協働も考えられる。その中で、これを理論言語学的に問うとは、「知識と信念の関係性」が言語の中でどのように定位され表現されるのか、知識や信念がコミュニケーションの中でどのようにやり取りされるのかを明らかにしていくことに他ならない。このプロジェクトでは、この問題を大きく談話参加者の「自己（意識）Self」の問題と、談話における「共有基盤 Common Ground」の形成と維持（共有基盤の運用と呼んでいくことにする）の問題に分けて考える。

問題の方向性を理論言語学の枠内でさらに明確にしようとするれば、談話と「文」（あるいは「命題」）のインターフェイスの問題ということになる。理論言語学のマントラに従えば、文はコミュニケーションの中で殻をまとった核となり、内部はそれ自体の規則と慣習が支配しており、それに従って「(文) 意味」も含めて「構造形成」をし、他方、文脈、脈絡の中で運用上の意味を帯びることになる。しかし近年の研究が示しているのは、文の周辺部で談話の中でそれぞれの文の取り扱いについて調整が行われるだけでなく、文の中には「文意味」に含まれない多くの推論を誘発する仕組みが組み込まれており、さらに「文意味」自体がそのような推論に左右される場合もあるという事実である。したがってこのプロジェクトでは、「知識と信念の関係性」が言語表現の解釈に与える影響と、「知識と信念の関係性」が言語構造、コミュニケーションの様態と織りなす相互干渉を問うことにする。

コミュニケーションは多くの場合、マルチモーダルだと言われる。これは直接的には媒介手段と回路の多重性を意味しているが、当然のことながら、伝えられる「内容」も複雑となる。その中で、とりわけ言語はヒトに顕著な媒介手段であり、また情報の観点から多くのことを正確に伝達している。言語の扱う情報の特徴を考えるにあたって、現実世界との対応から「真偽」を確定する側面、コミュニケーション、談話への「接続」から「共有基盤」を運用する側面、そしてなにより談話参加者の「心的態度」を表現する側面をこのプロジェクトでは考えていくことになる。

したがって本プロジェクトでは、言語が外からの情報（「文脈、脈絡」）との接触で変容し、同時に内部形式を整えていく様式に注目し、理論言語学の意味論・語用論、統語論をこの接触様式に関して拡充すること、関連する言語現象について上の3つの側面がどのように作用しているかを実証的に明らかにし、理論化することを試みる。これまでの成果から、類似の表現でも、言語間でこれらの側面が一様の取り扱いを受けるのではないことは明らかになってきたと考えている。そこで、言語比較、言語対照を含む、通言語的研究が必要となる。幸いヨーロッパ言語を専門とするメンバー、東アジア言語を専門とするメンバーの両方がプロジェクトに属しているので、その範囲で通言語的研究を実行していく。

それと同時に、いわば発展的な問題として談話の一貫性 coherence と談話の構造化の問題がある。文内の語彙項目や構文が誘因となって談話の結束性 cohesion が形成され、談話の構造化が行われる。近年ではこの一貫性は文から文への単純な関数的結節関係ではなく、1つの文から多重の推論が発せられ、文と文の間に複雑な結節関係が結ばれることが明らかになってきた。これは、各文における多層的な推論の形成という見方と整合的な見地だと言える。本プロジェクトでは、情報構造や議論の焦点としての疑問（Question under Discussion）の理論を基盤として、フォーカス、取り立て、分裂構文などを取り上げ、文とコミュニケーションの接触という観点に加えて、談話の一貫性と構造化の観点からも考察する。

コミュニケーションの成功は、発話者にとっての言語行為の成功と同じものではない。本プロジェクトでは、真偽、談話参加者の心的態度、共有基盤の運用を軸として、言語と言語使用のあり方と関係性を捉え直し、言語がコミュニケーションの中でどのように構造化されるかを明らかにしていく。グローバルな俯瞰力と世界諸地域の文化や社会の多様性を理解する取り組みの基底部分を支える研究と位置づけられよう。